

ていねいな気配りとあきらめない心

汐入東小学校 四年 後藤 萌希

柳田先生こんにちは。わたしは、『その手に1本の苗

木を』という本を読みました。わたしは、あまり絵本を
読まないけど、この本はとても心にのこって、絵本をあ
まり読まないわたしでも楽しむことができました。この
本は、「マータイさん」という一人の女の子が主人公です。
その子が生まれた所のケニアでは「イチジク」の木は神
の木とされていていました。幼いマータイさんもその木を大
切にしなければいけないことを知っていました。そのマ
ータイさんが二十さいの時、学問を学ぶためにアメリカ
に行きました。アメリカにいたのは五年間でした。しか
し帰るよ

「きれいな飲み水がない。」

など不満をつつたえたりする女性たちがいました。マー
タイさんはその女性たちに木を植えることをすすめたり、
兵士たちのかた手に苗木を持たせ、木を植える運動をす
るマータイさんの話です。

わたしも、マータイさんのように物を長い間大事にし
たことがあります。わたしは物がなくなるとひっ死にな
ってさがします。もちろん見つからない時だってありま
す。でも、あきらめずつづけると、ほとんど見つかりま
す。でも、マータイさんのようにいつもあきらめないわ
けではありません。

けれども、マータイさんは強い心をもって、大へんな
事でも自分からすすんでやります。一番は、マータイさ
んが作った苗木畑の苗木がほとんど枯れてしまったのに、
マータイさんは希ぼつをすてず、あきらめませんでした。
それにつられて女性たちも一本の木を切ると、そこに二

本の木を植えるようになっていました。そういう事にな

生き方をわたしはしたいです。

ったのはマータイさんのおかげです。しかもマータイさんは、村々の学校にも苗木をおくって、子どもたちに苗木の作り方を教えました。しかも、マータイさんは刑務所の囚人や軍たいの兵たいにまで、苗木をおくりました。そんないろんな人に気配りのできるマータイさんは、すばらしいと思いました。この本からは、あきらめてはいけない事と、あきらめなければ、それは大きな実になる事を学びました。

アフリカのケニアで国中に森を取り戻すための植樹運動を広めたマータイさんの物語『その手に一本の苗木を』を読んで、奨励賞の富樫さくらさんが書いた『もったいないばあさん』とは違う感動をして、大切なことに気づいたのでですね。

わたしは、これからマータイさんのようになんかがあってもけっして希ぼうをすてず、しっばいしてしまってもまたちようせんしたいです。そして、人のためになる事をして、いろんな人にすぐくていねいに、そして親切に

マータイさんは、植樹運動を始めた時、最初に作った苗木畑の苗木が全部枯れて失敗しても、希望を捨てることなく、再び挑戦しました。このようにはじめは失敗しても、決してあきらめないで、活動を続ける意思の強さに、萌希さんはいちばん心を打たれたのですね。

気を配る事ができて、強い意しやあきらめないという強い気持ちをもてる、そんなマータイさんのような人間の

マータイさんは、植樹運動を全国規模に広めるために、刑務所の囚人や軍隊の兵士たちまで参加を呼びかけるといふアイディア・ウーマンであると同時に、参加する人々、とくに女性たちに

細かく気配りをする人でした。そういうところにも、萌希さんは目を向けて、自分が学んだことを、次のように書いて自分の生き方にしたいというのです。

「何があってもけっして希ぼうをすてず、しっばいしてしまってもまたちようせんしたいです」

いつまでもこの絵本をそばに置いてください。